

顎関節症治療に対する新しい戦略と戦術

東京医科歯科大学歯学部附属病院

顎関節治療部 部長

准教授 木野 孔司

顎関節症の症状が改善しないと悩む先生からしばしば患者紹介を受けます。

そのような場合、患者さん自身のもつ、ある習癖行動が改善を阻害している例が少なくありません。

症状の発現、維持に関与する寄与因子にはいくつもありますが、それらの中でわれわれは現在、日中無意識に上下歯列を接触させている癖（上下歯列接触癖）の影響が大きいと考え、その是正と同時に積極的な開口訓練によって改善効果を上げています。

顎関節症治療の変遷を踏まえたその概要についてお話しします、この上下歯列接触癖をわれわれはTooth Contacting Habit (TCH)と名付け、患者に対するこの習癖の是正訓練指導に、臨床心理の領域で開発された行動変容法を応用した方法を適用しています。

また並行して実施する訓練療法として、復位を伴わない関節円板前方転位に対しては、たとえ円板をさらに前方に押し出すことになっても、積極的な可動化訓練を実施しています。